

皆さんこんにちは。  
エンカレッジアンドカンパニーの堀です。

私のコラムでは、中国の故事成語について、我々の日常に何か応用できないか、という観点で、シリーズとして書き綴っています。

第1回目は「牛耳る」という言葉についてお話ししました。

そこでは春秋戦国時代（今から 2,500 年ぐらい前）の春秋五覇を引合に出しました。

春秋五覇の中でも荘王は私が最もリスペクトする指導者であり、第2回は荘王のエピソードが語源の故事成語についてお話しします。

第2回「鳴かず飛ばず」です。

現在、我々は何か期待していたのに、うんともすんとも言わず、何の活躍もなく終了してしまった様を鳴かず飛ばずと言いますね。つまり、なにも起こらなかった状態ですね。鳴かず飛ばずの語源は、なにも起こらなかったことに着目しているのではなく、目的を持ってなにも起こさなかったのです。

荘王は王位在籍時、無能な王のフリをし、政治に一切関心を持たずに酒や博打や色ごとに耽りました。それはつまり、無能なフリをして、そこで露わになる部下の本質を見極めるのが目的だったのです。

見かねて忠臣の1人が、「ある鳥が3年の間、全く飛ばず、全く鳴きませんでした。この鳥の名は何と言うのでしょうか?」と聞き、荘王の目を覚まそうとしました。荘王は「その鳥は一旦飛び立てば天まで届き、一旦鳴けば、人を驚かせるだろう。お前の言いたい事はわかっている。下がれ!」と返事をしました。

3年後荘王は無能なフリをしている間に見極めた忠臣を多数重用し、佞臣（忠臣の対義語）を誅殺しました。大改革をおこなったわけです。

鳴かず飛ばずの語源は鳥が重要なのではなく、荘王の忠臣を見極める仮説が重要だったのですね。さすが春秋五覇の1人ですね。

堀 洋三